

ゴミ箱の中には思い出が詰まっている——部屋の掃除をするたびに思うこと。

これはチェンジされて苛ついた時に自棄になって飲んだワンカップ大関の瓶。延長したお客さんに興奮して破られたストッキング。お茶っぴきで退屈しのに買ったエロ週刊誌と風俗求人雑誌。ああ、懐かしい……ほんの1週間前の出来事なのに、もう懐かしく感じる。

「分別しろ」

クソ浪漫もない冷静な一言を放つ鉄仮面を無視して、あたしはゴミをゴミ袋の中に突っ込んだ。鉄仮面には繊細な女心に寄り添う心の余裕などあるはずもない。

「依頼が入ったぞ」

鉄仮面こと倉本剛は残念ながらあたしの上司なので、一応、返事はしないとしない。

「あたくし、デリヘルで真面目に労働する風俗嬢、でございますが？」

「内藤様のご指名だ。浮気調査だ」

「やだ」

「お得意様たつての依頼だぞ」

出た。コイツの「お得意様たつての依頼」。お客様は神様だ、を地で行く昭和の男、鉄仮面こと倉本には、雇用するデリヘル嬢の人権など頭の片隅にもない。倉本があたしにやらせようとするのは、正直、犯罪に近い。

「接客するお客様から浮気の証拠を掴むなんてこと、あたしにはできませ〜ん」

「やってきただろ、今までも」

「無理やりやらせたんだろ！」

「まあまあ、愛ちゃん」

事の様子を砂漠を歩くラクダの如き忍耐力で見ている、デリバリーヘルス「AMOUR(アムール)」の事務員、みどりさんは、静かにあたしたちの間に割って入った。この人にしかできないタイミングで。

「でもみどりさん！」

「世界平和のためだと思えばいいのよ」

「はい？」

みどりさんの事、大好きなんだけど……上京してデリヘルで働く女になったばかりのあたしの面倒を見てもらって感謝しているんだけど、やっぱり時々、理解できない。倉本曰く、みどりさんは頭が良すぎて話が飛躍しすぎるらしい。思考スピードが人とは違うらしいのだ。

「内藤様の奥様の浮気を暴けば、内藤様のモヤモヤも晴れ、内藤様の抱える部下達も八つ当たりを受けることなく、奥様も堂々と浮気相手とセックスできるようになるでしょ」

「え？内藤さん、自分の奥さんの浮気調査をあたしに頼んできたの！？」

みどりさんの飛躍しすぎの解説をすっ飛ばし、あたしは思った疑問を口にした。思ったこと＝言葉のあたし、いい意味でも悪いみでも裏表なし！ そんな正直すぎるデリヘル嬢が探偵まがいなことやっていいの？と思うんだけど、なぜか需要があるのだから、世の中分かんない。

「ま、そういうことだ」

「なんか情けなくない？男として」

「内藤様はこの問題で1年も悩んでおられるそうだ」

「悩んでおられるそうだ、じゃなくてさ」

お客様がすることは絶対、の倉本には何を言っても通じない。そしてあたしが倉本の依頼を断ることも、まず